

## 12 世紀における蒙古諸部族の言語

『長田夏樹論述集（下）』第9章  
（原載：『東方学』第5号，1952年12月）

13-14 世紀のモンゴル語の資料として、ウイグル字、パスパ字、漢字、アラビア字、アルメニア字、グルジア字で書かれたものが知られている。その中で、アルメニア字とグルジア字による資料にはわずかの単語や表現が記述されているだけであるが、他の4種の資料は一定以上の量を持ち、当時のモンゴル語の姿を知るにあたって非常に重要なものである。

これら4種類の文字で記されたモンゴル語は、ほぼ同時代に書かれたものであるとは言え、それぞれ異なった部分がある。それを表記上の問題として考える立場もあつたが、長田夏樹はこの論文の「第2節 表記形式と音価の関係」において

- A パスパ字・漢字による資料
- B ウイグル字による資料
- C アラビア字による資料

の3者の間に見られる違いは12世紀末におけるモンゴル語の方言を忠実に記したことによるものであるという結論を各資料に現れたモンゴル語の音韻比較によって導く。そして、「第3節 各資料とそれの基づく方言」において、興味深い見解を示す。それによれば、元朝においてパスパ字を作成した第1の理由は、当時のモンゴル語諸方言を統一し、元朝宮廷語（すなわち、モンゴル部の言語）を官用語ないし標準語として広めるためであった。そして、ウイグル字文献のモンゴル語がパスパ字文献に表れたモンゴル部のモンゴル語と異なっているのは、ウイグル字による書写語はすでに文字を持っていたモンゴル系のケレイト部からモンゴル部が完成された文語として取り入れたものであるためだと言う。これは結果的にウラジーミルツォフのモンゴル文語ケレイト起源説を支持するものであるが、さらにケレイト部は柔然国の余裔であるという考えを示す。漢字文献のモンゴル語については、パスパ字文献のものと酷似しているので、やはりモンゴル部の言語を表したと考え、アラビア字のものは音韻・語彙の点からオイラド系であろうと述べる。

なお、「モンゴル」という語の遼金代の漢字による訳音に

- (イ) mangyol
- (ロ) mongyol
- (ハ) moyal

を表したと考えられる3つの系統があることについてもそれを方言の違いの反映と見、現代の諸方言に(イ)(ロ)を直接の祖とするものは見られないが、(ハ)はモゴール語がそ

れに当たるといふ見解を示す。

中期モンゴル語の主な資料は 20 世紀前半に多くが校訂・出版され、比較的容易に利用できるようになった。この論文は当時利用可能であった資料に基づいて 12 世紀のモンゴル語について考察し、さらには現代諸方言とのつながりまで考察したもので、広い視野に立った論考であると言える。

(斎藤純男)